

戦争記憶の継承に日本独自の新たな扉を開く。

ダークツーリズムとポップカルチャーからの視点が生む、日本の新たな「メモリー・スタディーズ」の可能性。

日本の戦争記憶は多様・複雑で、ヒロシマなどの“公式な”記憶の影に無数の“非公式な”記憶が存在します。本研究では、集合的記憶におけるポップカルチャーの役割に注目し、ダークツーリズム研究と融合させて、新たな視点を提供します。例えば広島県大久野島では毒ガス工場跡と“うさぎの島”が共存するパラドックスがあり、そこに独自の記憶継承が見いだせます。本研究は戦争記憶の構築プロセスの解明を目指します。

研究代表者

吉田香織

YOSHIDA Kaori



立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部 教授

「次世代を担う人々が、複雑な戦争記憶の構築と構造などを理解し、新しい社会を築くことを願っています」

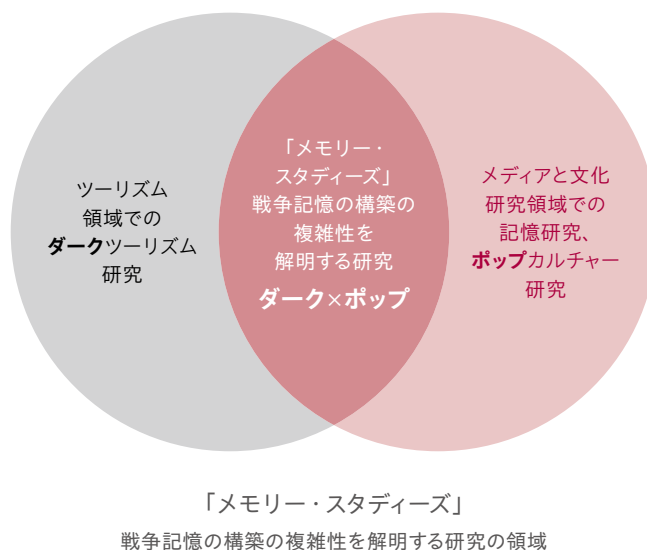
新規性・独自性 | 脱西洋視点の複層的アプローチで、新しい戦争記憶の構築の多面性を解明する。

本研究は「メモリー・スタディーズ」というキーワードのもと、社会学や観光学などによる戦争記憶研究を重ね、脱西洋の視点からアプローチすることを試んでいます。死や悲しみを強調する欧米の「ダークツーリズム」に対し、希望や平和を重視する日本ならではの「希望ツーリズム」などの概念を提示。また、戦争記憶の再構築においてアニメ・マンガなどのポップカルチャーや、SNSに影響される観光の果たす役割にも注目しています。

広島県大久野島を主なフィールドに、毒ガス製造工場のダークな戦争遺産が、“うさぎの島”として人気観光地になっている状況を研究し、痛みとレジャー、ダークとポップが共存する環境が、若い世代の新しい記憶継承の可能性を開くことを明らかにしようとしています。



大久野島では、毒ガス工場の遺跡にも多くのウサギがいる。訪問者からは、「ウサギのかわいらしさと遺跡の不気味さの対比が、不思議と魅力的」「戦争の悲惨さが心に重くのしかかるが、ウサギたちが慰めてくれる」といった声上がる。痛みと楽しみ、ダークとポップが、対立するのではなく、補完し合っている。(研究代表者が撮影)



社会連携に向けて | 多様な主体と協働することで、学際的な研究を、記憶継承の実践へとつなげる。

「メモリー・スタディーズ」の研究成果は、さまざまな形での社会連携が期待されます。学校教育の修学旅行やインバウンド観光客向けの教育プログラムなどでは、戦争の悲惨さだけでなく、現代的文脈の中で平和の意味を考えさせる新しいアプローチの提案が可能です。平和学習、記憶継承団体とは、戦争体験者の高齢化が進む中、地域ボランテ

ィアガイドとの連携を深め、戦争遺跡の保存・活用に関する提言や地域の記憶アーカイブ作成にも取り組んでいます。戦争遺産を持つ自治体とは、地域ならではの戦争記憶の調査・継承のための協働を目指します。さらに国際的な記憶研究ネットワークとの共同研究などから、アジアにおける戦争記憶研究の新たな扉を開くことを目指します。

